

天理大学附属天理図書館蔵 大隈言道『続草徑集』翻刻と解題（二）

進藤，康子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/19508>

出版情報：文献探究. 47, pp.23-38, 2009-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

大隈言道『続草径集』翻刻と解題(二)

進藤康子

364 あまりにもまたるゝ故にあまへてもさかてあるか^えとこすゑをそ
みる

365 けさみれはゆきの白妙うちきせてよこほりふせるさよの中山

をしへ子岡千竹十四のはるみまかりければ

366 なにしかも竹のちよにはならへけむ其かひもなみ君か名ゝれ
は

367 かしましきいちに在間そ山郷に心は行てわかみすみける

368 はるのことゝりはむ事もおもはねといろつくうれし軒の山柿

(一六・オ)

369 はる立て水なかれくる春川にさることしらて生る若くさ^{ホソ}

370 秋の日のさせるかたこそいろつかめこなたは青きそのゝ橘

371 さひしさにわか山のまのいほつ鳥いほにそひても道に離れす

372 ものけなくますくに立る杉村のさて過ぬれは過る世の中

373 ひくれてもひさになれるを何^{イツ}の時今夜は月のいつるよならむ

374 かをこめてやわら／＼もふく風の花の盛りになるけしき哉

375 春は花秋は月にとくらしあかしあそふにひまも無身なりけり

376 ひもすから落つかれても【あり】^{やみ}かほに軒の雫の数のまとほさ
 377 いつよりかもとに角組あし原のこそのかれはゝ立すてにして
 378 春秋を一つになせるとしもかな花もゝみちもちりましるへく
 379 みそら行おのかつら／＼遠近にわかれてあさる小田のかりかね
 380 いちはやき人の心は耳に見えめにもきこゆる世に社ありけれ
 381 おとろへて七十ちかくなれる身もこゝろは三四十也けり
 382 大津うしのあへき／＼てみくるしく何の契にかくは生れし
 383 いろさへもうつろひいてゝ秋のゝにたかきふるしの藤袴そも
 384 夏くさはかれ行まゝにたけ／＼て夕日さしたるやとのさひしさ
 385 くれなゐのすゑわかつにも摘花のうるごとすくなもとめ／＼て
 386 帰雁かへるを兼て告すして思もかけす立田面かな

(二六・ウ)

387 ゆくかりの行をゝしめは我さへも花をわすれて見たるたくれ
 388 花はみなものこらすなれるこすゑにも獨さわける春の山風
 389 にはのおものまさこもはかす土筆やかて頭のいてもするやと
 390 わかゝよふ垣ねの風のたひ／＼も行あふものはそのゝ梅香
 391 風たえてかをりいてたる梅かゝはさそはれしとや隠あつらむ
 392 うめは皆ちり／＼にこそちりゆけと香かためても庭は満けり
 393 たちよりてうつさはやとも思ふまにかなたよりくるそでの梅香
 394 わたるまにかくれてそ行今はしの半に見ゆるかつらきのみね
 395 ゆきはかりいらかの上に見ゆる哉みね／＼遠きわたなへの橋
 396 なをつめはのへの寒さもさむけれとやとよりおもふ程はなかり
 397 としわかき人はわかなもひとしきを老こそあへて摘へかりけれ^え

398 春雨はやますふれとももゝ鳥のさへつるこゑは日よけなる哉

(一七・オ)

399 けふはまたその玉もに引かへて川上にのみなひく青柳

400 終夜おとせし風のわさならむつゆ一なき青柳のいと

401 ともすれはさくらかえたに糸かけて花も柳も中よけにみゆ

402 庭松のなよけもなしのまへにしてたれさましつき青柳のいと

403 もろともにこゝろあひなる中なれや雪も柳のいとゝこそふれ

404 よそにのみ遠くなかるゝ春霞棚引かへす山風もかな

405 おのれからたくひてくれはめに見えぬかさへをりとする梅の枝哉

406 春の野のところ／＼にわかな摘少女もかりのつら／＼にして

407 花ぬれときゝつることもなかりけりいかなる音ぞ鴨の羽かき

408 とほ山はこのれる雪のまた見えてなの花寒きのへの朝風

409 土筆たてるさまさへおのつから庭ものへなるきさらきのやと

410 とをあくとおしはからるゝ程計草立ならぬ山さとのには

(一七・ウ)

411 山さとのいつかたまれる春の水うかふこのはにもられさりけり

412 藤もやゝ夏ちかきまでさかりきて肩狭つはき春の山越

413 いつこまでのひに伸らん竹のこのひろとるへくもあらぬ高さに

414 花もなくはるくれかたのさひしきにしる人たにもかとをよきす
て

415 われからのあつらへならてさくら花に雨をそへても見たる夕く
れ

416 わかやとのそらは過なて山とほきそなたのみ行夏のよの月

417 くだけたる花もとほくにちりゆかてこかけをさらぬ玉つはき哉

418 うつみ火もなくてさし入まとのこち月影さむし夏のはしめに

419 まとのどのかみのひとへはせきたれとやふるはかけに打あられ
哉

- 420 ちりのこる花はわかにはかりきて日に／＼はるそ夏になり行
し
- 421 きのみまてふすま覆ひし埋火はきえてもゝとは離さりけり
なゝそちもよそちいそちのほとかほに見ゆるやちよのしるしな
るらむ
- 422 玉葛つら／＼まどふさまみれは我にかはらぬすぐせありけり
さかりなる花をくたしてはるさめの後にも日よくなるにくさ哉
いほにありて独ぬれぬもあちきなしいつこの花も雨にくつるを
- (一八・オ)
- 423 なつくれば風のあたるを多みかほにのきのわかはこのゝちよけ
なる
うらふれしやなきのにはに春雨のわひしきほとも見ゆる糸かな
- 424 とのとほくとなりにさけるうめのはな垣のこなたに枝もかはさ
はるさめのはるゝをしりて青柳の糸の白玉落そとまれる
て
- 425 人ならはにくしとみむをうめのはな枝さし過てふさはしけなる
山とほくたなひくゝもゝやはらひて花にこゝろのゆらくころか
な
- 426 かきねにはけのこつ雪もあるものを時めかしくもわたるはる風
な
(一八・ウ)
- 427 なか／＼に人とひこえて花そちるゆすりみちても見つゝたてれ
は
もろともにおなし心か青柳もあめよこきればよこになひきて
- 428 見くるしくくたれしそてにこほれきて人わきせぬはさくらなり
かきりなくうちたれぬらし青柳の月のまへにもいくすちのいと
けり
つりたるゝ人とは見なて青柳のいともうかふ川のうろくつ
- 429 をとめらもうたひ／＼てわかな摘世のゝとけさははるの野そか
月いてゝ見れはその木も立にけりいとのみたるゝ玉のを柳
- 436 437 438 439

440 うちわたすたにのたかはし橋こしに長て見えたるふちなみのは
な
441 わかれのこるこまさへゆたに行ものを独かけたる山ほとゝきす
442 わたし舟行かふこともたひ／＼を行てかへらぬほとゝきす哉
443 ほとゝきすおのかなかねはやみもなしみゆはかりにもこゑの聞
えて
444 あかつきのそらになるまで子規今きなくねのつゝかましかは
445 あけわたるそらにおはれて子規にしにやいそくあかつきのこゑ
り
446 明かたくまたくれやすくはるさめにけふはみちかき春日なりけ
り
447 人つてのみなまことゝもおほえぬはきかぬか故のほとゝきす哉
(一九・オ)

448 照月はものもいはねと子規おのれはさては人もゆるさし
449 いくこゑもきゝつる人の子規心にたにもなるよしのなき
450 おとろきてこゑたえぬへし子規何ゆゑかうつ夏のよ砦
451 なくこゑのつゝきかわらは子規行かはしめて見へき野そかし
452 もろともに行あふさかの子規こゑもいてあへす別ぬる哉
453 あかつきのくもにあひぬる月影を見とけてもなけ山郭公
454 こすゑよりひさしに落雫たにねやにやもるとおもふよの雨
をり／＼の世をなくさめのまにも相てわかつたのもしき子規かな
455 おのつからをしむ心に山さくらをらぬはをるにまさる也けり
456 山部よりめてしかへさに花の枝もたぬはこゝろなけの人かは
457 きつゝゆくそのに玉なすはる雨にわひしさしらて誰か見へき
458 うまくるまどゝろくおとも市めきて道もさりあへぬさとの入口
459 としをへて人すくなしときゝもあへすわかさとはやく野にそ成
行

(一九・ウ)

461 とふ人もすくなきやとはいちにても山郷めけるしわさをする

462 そなたこそこゝろやすけれとかくせてなけきにきゆる里の灯

463 世の中のみちをみちともせぬかほに行ききふたく野霞哉

464 きえずとももとよりこゝろくらやみにとちぬめをさへ見せぬ夜哉

465 つゆたにもちよのかすにて松のはの一葉／＼にぬける白玉

466 たな引てかすみかくれのさくらはな簾の中なるたをやめそかし

467 のとかにもやとりし月のあられかはこゝよりせとかさゝ波の立

468 ひとゝせのはなのさかりに晦日のこもりてやみのそらぞ詫しき

469 このもとにかす／＼【足】^{たち}て石葦の一つにもならずたてるよの中

470 ねこのこのうたておほかる子生^コしにいかなる人か一人まさらむ

471 ひかすへてあめふくみたるやつれ垣あてこそあるゝことはしる
けれ

472 そらの月かなたこなたの定まらて船うこきたるにひみなとかな

473 さよふけて【^{ゆきかふ}わたりの】船はたえたれと川わたりくるころもうつ
ころ

474 くれゆけは立ならひたるいへことにきぬたのおともつゝ今里

475 中々にけ行かこそまさりけれあたりくるしくあつき蚊遣火

476 ひとり見て独ともこそおもほえねそらなる月を友とする身は

477 いつるより入までわれにむかめあひてよそに向はぬそらの月影

478 山のはにまちえし月は見え乍また出かぬる池のおもかな

479 ●みわたせは朝きり立て行末のなけなる橋も人はわたれり

480 ほたるみる人のためなる五月やみ月をわするゝ西にさりける

481 はるかなるこすゑに行て飛ほたるともさぬまにや遠さかるらむ

(二〇・ウ)

482 ●一はなをいくはく花か集てもまた一はなのあちさるのはな

483 とりさらて帰るさ苗のを山田に夕くれさむく小波ぞ立

484 ●皆人はきゝしとかたる子規こそこのゑたにかたりいてにや

485 もろともにはしめせずして小規かすかに聞し末のこゑ

486 ●ほとゝきす妹かきゝつるこゑにわれさへ漏し心地こそせね

487 ●あまりにも人伝おほし子規まことは聞ぬこゑやましれる

488 ●山川の清き【おと】かたさへ子規尋ありきに見せてける哉

489 ●はかせさへわかみのほとにへる迄もけさ鳴過し子規哉

490 ●なき過したゝ今のまに子規あまた聞つる身となりにけり

491 さきのこるやへ山ふきの一二をこゑのかすにて鳴時鳥

492 ●むらさめのそらおもしろみ子規なきそはへても出くなる哉

(二一・オ)

493 ●うと／＼しせをのみ見せて子規とほきをのへに昇るなる哉 タクレ

494 ●けさみれば枝わかれてくれたけの子をとらるへき時は過けり

495 かねなからおちはしらぬるくぬきはゝ夏をは春の半とや思ふ

496 としことに卯月のはしめ風さむみころもかたへる夏の無哉

497 水をはやみなるゝ蛙汝のみかすかる所もなけのよの中

498 二三はつ花ひらく杜若かすかそふるかおもしろき哉 アハレ

499 ●大たをの山のさくらはさきにけり唐土人のめのまへにして

花下春

500 いたのうへは白龍にこそなりにけれまかふ計もちれる桜に

501 今はさはとりのけかたくなりぬらむ雲井にちれるちゝの紅葉

502 とらたにもをしゆるこゑを聞きりてぬさもおくるも人のまに

<

503 雲やらふものとおもへは中々にさそひいてたる月のさよ風

(二一・ウ)

504 みたれたるわらもそらへそ象の鼻手もありながら手もなしにし
て

505 はしりてのまへひろけなる門の庭うちいてよとのところ也けり

506 すさきより川におり立たつのさきいはてもしるしちよのすかた
は

507 たか膝もおのかねとことぬるねこのしれるしらする人ゑりもせ
て

508 人ちかくみるをもしらて蝸牛ひとりすのこの前わたりかな

509 行かへはすそにもつるゝねこまたにもさひしかるはる雨のこ
ろ

510 はるのひも入かけさむし行かひてあたゝけかりし大路にはにす

511 見くるしくちりおほけなるおのかやとことしけきにやよれるな
るらむ

512 すむ人もすくなきやとのねやの内中々にこそちりもつもらね

513 いろかへてまためつらしや山吹のそのすかたなるかきのうの花

514 さわかしき風をはよきて山さとの静き時に立けふり哉

515 かすかなるかこそは増れうめの花その初花をまちつけしころ

(二一・オ)

516 さと人の日くるゝまでのたにありて見なれし物は名月のかけ

517 そなたよりわかれてにふるゝ花の枝わかをるとのみ思はさらなむ

518 うちたるゝいとゆたけさにわれのみか月も柳によりてきにけり

519 ○風ふけは枝にけかほになひけともとらへしさくら放つものかは

- 520 ○たをれともいひかほにしてゆかしけにわかそてによる青柳のいと
- 521 ○うちたるゝやなきのいと水そこのかけのいともつゝくはかりそ
- 522 かたよれば柳のかけにいてにけりわれに向へる水その月
- 523 ○おのれにてほしさはしりぬさくら花わか折枝をみるわらはとも
- 524 きしにさく花のさかりをかたよりて汀も月の離れさりけり
- 525 いそきはの花のさかりは大井川汀きしりて月そなかるゝ
- 526 おのかみのいとゝかるさに飛螢おぢかほもなし深淵の上
(二二・ウ)
- 527 ゆきのうへにあとつけしとやうまもうしも人ふみ別し前を行らん
- 528 月のおもにさは妨もなさしかしみじろき顔に見ゆるしらくも
- 529 をきのほもほろゝき立て名月のかけにひかれる柴垣のかと
- 530 さかりなるしをにの花の升かたみすゑのみいてゝさける垣外
- 531 雨ふれは水のおもたか【タカ、ラテ荅のみ】わつかにみゆる川のいそかな
- 532 翁ともたくひのほほそらさまにまたちりかへる庭の紅葉
- 533 おもけにも垣にさかれるなりひさこ軽くなりなむ後の楽しき
- 534 たらさりし昔こそいとこひしけれあまりて長き三重結の帯
- 535 ○はるさめに日すからぬるゝ藤花をしけなきこそいとゝをしけれ
- 536 ○秋萩のさけるかた／＼みに行は一花ことにそへる月影
- 537 ○もろ手にやもてかへらまし浅茅原折てはおける秋萩の枝
(二三・オ)
- 538 ○たひにしていのちはてしと帰雁かへるこゝろはわれにてそしる
- 539 ○かく山の山なみ見れは子規なくねきかてはえこそゆかれね
- 540 ○なかれゆく水そこ見れは名月のかけさへそへる杜若哉

- 541 ○こす多よりかけいてくれはみなそこの月にもしたるたるゝ藤波のはな
- 542 ゆ【ふ】たけにてなかるゝ水も杜若花こゝろをそへかほにして
- 543 朝夕にかはるこゝろの身おもへはわれさへわかみたのまれなく
に
- 544 早きせになかれて花の行時そかへらぬ水はいとゝ悔しき
- 545 ○ほともなく花のちりくるさき止て句来かの盛也けり
- 546 身にそへてはしみせきする灯にさくらちりくる灯のまへ
- 547 ○にし山のみねにもあらてる月の唯入にいる花のおく哉
- 548 わらはへのすくひあけたるさてのうを飛にも光夕月の影
- 549 ○かたましくゑりつくろへる心様いくへかさぬるころもなるらむ
- 550 ○さくらはなちらすはかりはまたなくて吹こゝろみるけさの朝風
- 551 きせかほに花ちりくれと衣手の朝風寒二月のそら
- 552 ○わかはさへ生におふるは花ちかし枝さひしくもせぬこゝろかも
- 553 ○今よりは清きこゝろのまゝならむ風をなこめてすめる月影
- 554 ○にはたつみきはだゝしくなかるれは影のそき見る山吹のはな
- 555 ○にはたつみなかるゝにはに隈みえて汀たゝしき山ふきの【はな】カゲ
- 556 ○さひしさをすへなくをれはこのまよりものいひかくる鶯のこゑ
に
- 557 わかそでのぬるゝもしらてはしちかに遠く見おくる夕立の雨
- 558 ○さくらはなのとかにゝほふこのまにもさして入くるよのうさそ
うき
- 559 こほれたるのきはも見えぬたちか夕くれに花のみしるき夕かほのは
な
- 560 ○かりなきて来る比ゆかしあまた日をあつきはかりにくらし

くらせは
【／＼て】

(二四・オ)

561 ○なつくれはこゝろかはりて見たにもいとはしけなるねやの古
衣

562 ○くも清くたなひくそらの夕くれにねのみもまたぬほとゝきす哉

563 ○ゆく水をけさいてきぬる川ほねのいかにしつみて苦しかりけむ

564 ○しらくものたな引すゑに行鳥の行はつれまくをしき空かな

565 ○故郷のかきねこもりのきり／＼すこまれるこゑはまとほなる哉

566 ○をとめらか摘はかりこそ生にしかかはらよもきの夏の丈立

567 ○うちむれて折みたりし【を】^もよのまにもつくりひかへす秋あきの
花

568 ○雨のうちにのへのさわらひ皆もえてのこるましくも見ゆるけさ
哉

569 ○けさ生てまだ種かつく松の子もいくとせへてか雪かゝらまし

570 ○風たてはかきつの池にちるうめ【のちる】にけしき立てもうこく
うすらひ

571 みきにはうをこそをとれみつしほ【の】^もかしこき計見ゆる川口

(二四・ウ)

572 花のかけひろはかりにもむすこけはわれにぬよとのおましなり
けり

573 そらはれて水のおもたか隠れしはみかさや増る川かみの雨

574 秋くれはくりのいかなる契にて手もふれかたきこのみなるらむ

575 ○さみたれはくつれ落たる片きしの草【生】^立乍なかれぬる哉

576 いふせくてかひたる夏のまゆのみか人もくるしきいほのうち哉

577 ○こゝちよくふるひわくへきわさもなくまみれかちなる塵のよの
外

578 はるふかみ花にはあらたわたのこと軒のふちな風の風にちるなり

579 はるくれてまろねさひしき庵の内人たにとひて驚ろかせかし

580 ○たまさかに手折るあとを見てゝは誰そと尋る山さとのはな

581 ○よそ乍みてもすくれとさく花は皆しる人のさくらなりけり

582 ほともなくひもとくはかりなりてたにまたするものは桜也けり

583 ○今そしるくるしきものは人ならてわれにまたするさくらなりけり

(二五・オ)

584 わかやとの花はをしみてこゝろなくよそなる花をゝりありきけり

征
軍人折花

585 ○樋の口のさくらは咎もなきものをあまたいたてをおはすなる哉

哉

586 わきもこかぬひもおはらぬきぬのうへにとくあかりてもわたるからねこ

587 ○てふるれは花のけしきをそこなひつ必枝を折えられるならねと

588 いつもかく長々しかるうたゝねにすかのねともし無はる日かな

589 ○わかゝとの榎のきのわかは青みきて温け過さとの入口

ハルノソラカナ

590 ○来ればあて行は見すつるかた哉余りに雁のこゝちよろしき

591 をすこしに又はかゝけて見る月はかけかはれるかおもしろき哉

592 ゆきとのみこすゑの花のちりつみてそてもふらさぬ杜のかよひち

593 ○そのたのみあかせる見れはうと／＼しよはの灯こなたむけはや

594 ほとゝきす遠さかるねに引かへてやゝちかつくは村雨のそら

(二五・ウ)

- 595 ○石草の一葉【なからに】ヒトハニむれたちておのれもそよく秋のはるか
せ
- 596 灯のはなやかなれは雨もやみ軒くらきよもすゝしかりけり
- 597 しほさきをまつやりこして岸陰に心よけくもまふみなはかな
- 598 よもすから人【を】とかむトテ【る】フレツくたひれは朝ゐの犬のねたる
四辻
- 599 雨にさへ行かよひする蝸牛竹垣なりなおのかくるま路
- 600 行かはのあさみにつとふうろくつの身にふさはしき居所哉
- 601 ○はりまかたむら山さくらちりて社泊りの船もあまた出けり
- 602 ○きのふまでいくさありつる海はらも立るかすみは長閑かりけれ
- 603 ○夕くれの汀すゝしきけしき哉さゝけて立るきしのつは草
- 604 ○音きけは行へもわかぬ夜中にもこゝろたくひて【下山水】タニノ下水
- 605 ○あさいしてつもれるゆきやしらさらむひらかぬ門の並市中
(二六・オ)
- 606 おとろけはひるかへりても【飛】蝶のまたゝくすきにきぬる【ねふれる花の豊なる
花かな
哉】
- 607 ゆくまゝに塘かくれの杜若すゑ見えきぬる【こもはら】のさとツハクラ
- 608 ほとゝきすまたてありつる人かほにおとろかれたる今の初こゑ
- 609 さはかりのこよひの月に何事そよそかほにしてゆくほとゝきす
- 610 おのかさく中をとほしてかた／＼に行水みたる杜若かな
- 611 杜若【すゝしかるへくすかたさへ】すかたにみせて水に咲けりオノカコ、ロニス、シサモ
- 612 中々にめをとめられてうりつるのさかえのほれるにはのしはか
き

613 いほならぬそのふにしても 蠅むれていかにわひしきくさ【は】^きな
るらむ

614 はるくれは立いそかるゝをたの雁ゆたに歩みてあらむころかは

615 さくらはなかたにそてにもちりくれとなつかしけなるひさのう
へかな

616 顧るあとまちかくて大御世のゆたけかり【つる程そ】^{しが今そ}こひしき
(二六・ウ)

617 ミトリノミヽルモ
【おなしいろのみとり】久しき夏の草の野に さきまし【り】
なてしこの花

618 あさみこそすゝしけならし夏川の汀つたひにすめる月かけ
^{ニキテモ}

619 はるのひのうらゝかなれは風もなくうこくをまちて柳そを見る
はるの花あるをもしらぬもみちはのあきはかりなる此世とやお
もふ

621 水のうへにわかこゝろさへさそひいてゝやみときゆるはほたる
也けり

622 ○いろ／＼にさま／＼に木の生すかたあはれとみるにあかぬ山さ
と

623 花ひらのおちてかけたる【けさ見れは】^{はるのすゑ}さくらも老【の】^てすけみ

【たるかな】
とそ見え

【老人は花(ママ)】

624 一朶の一葉／＼に立ぬれば さひし【かほなる】やまさと
のには ^{かならず}

625 をちこちにこみち【のちまた】おもしろきのへ山へにもすみし老
哉 ^{を見るも}

626 をちこちにかよふ径のなつかしき野へにかへりてまたもすまは
や ^{にあるましを市にすみけり}

627 まとの外過行人はたゞ過て見入かほなるうめの枝哉

628 おのれのみきゆるをみするほたる哉もとよりやみは何もなき野
に

629 こひせぬは人もなけれと家のねこあまりにこゑの【かし】ましき
哉 アサ

(二七・オ)

630 山やすく立るをみれば世の人はせは／＼しかるこみちなりけり

631 ふるあめにみかさまさりてまとぬせしなの川のすはうをそあそ
へる

632 そめいとをかけたる松の藤波はおる人なしにちりにけるかな

633 花をオれはその日一日はこゝちよしあしたのほと春のしわさか

634 かすみたちのへのごみちのおもしろみまねひいふへき春けしき
かは

635 はけしきにおそるゝ風もなぐまゝにまたうきものとせぬやとり

かな

636 朝よひにむかひふるせし夏の山まためつらしき秋の山哉

637 あさとてのけさのうちみに山も野も見せぬきりこそけさは見せ
けれ

638 さそひくる風はなくてもうめのはなすこしなる香にたるこゝろ
かな

639 山さとのけしきになしてふる雪にこゝろいかにつはのいち人
ヲイヤハハミタル

640 めつらしくうひに入こしこゝちしてきことにあたるにはの秋風

641 なつかしくかたる【詞も】子規人つてならてきくこゝちかな
ヲキケハ

642 すくなしな道の長手の長きにもひとこゑ聞き子規哉

643 あめふれはすゑの池さへしりかほにさしてもいそくにはたつみ
哉

(二七・ウ)

- 644 はるかなるこたちのおくの灯も人の立居も見ゆる山さと
- 645 一家とおもひしほとに人すみてとなり／＼のそへる山さと
- 646 こなたこそなひきたりける暁のはしめて見ゆる青柳のいと
に
- 647 はつかなるみちをよりこてよそさまに見てのみ人の過る山さと
- 648 秋よりも冬めくそらのさむさ哉すゑはいかなることしなるらむ
- 649 となりより垣ほを分て見る人になれこそにたれ梅の一枝
- 650 そなたより流いつるかおもしろみ下行花を橋にみるかな
- 651 はかなさは何をかなにゝたとふへきたゝ世はもろきもの集め也
- 652 やせ／＼てかれしさまさへ夏草のものさひしかる故郷のには
- 653 たまさかにいきかへるへき雨もなく日にけにかゝる庭の夏草
- 654 きの方にやかはるとみればまとの竹けさまた同しかたなひき哉
- 655 玉たれのをすのうちよりみらるゝや庭の一本の花もうれしき

656 ともすれば風のみそくる庵のまとまたるゝうめのかはさそひ

【き】て

(二八・才)

「次号に続く」

註

凡例は、本誌46号参照のこと。

付記

本稿の資料閲覧、および翻刻については、天理大学附属図書館に御許可を賜った。
 ここに深甚の謝意を表する次第である。

(しんとう やすこ・本学大学院博士後期課程)